

目的 仕事と家庭を両立させている女性が増加している中で、大学1年次学生の「家庭生活」認識は、夫婦分業の家庭生活を中心としたもので、共働き家庭の生活に対する理解は貧困である。「共働き家庭に関する認識」と「共働き家庭の実態」を学生を対象として調査し、家政学における家庭研究への足がかりとする。

方法 【調査A】対象・昭和女子大学短期大学部および東京都立立川短期大学1年次学生191名。配布・各クラス毎に配布し回収。回収率100%。夫婦分業家庭と共働き家庭の認識特徴の分析。【調査B】対象・同上対象より共働き家庭に育った学生を身上調査により抽出。配布・何人かに配布し翌日回収。回収率95%内有効回答50部。調査Aにおける確認部分のうち「共働き家庭に対するマイナスイメージ」に焦点を当て一般の学生の認識と共働き家庭における生活経験による実態との相違を分析。

結果 【調査A】において学生は①夫婦分業家庭く専に「夫・子・家庭に+」②共働き家庭く専に「+、夫・子・家庭に-」と認識する。【調査B】において共働き家庭の学生はく「+」と認識する。①家事状態、妻と夫・子との相互関係は長く「甘え、母親依存」のかわりに協力と自立が成立する②母親の能力とタイプが影響力をとり、仕事と家庭のぎりがえ上手、家事の手際良さ、個性趣味ありの母に娘は共感・評価する③生活のゆとりが上手にはかれ、家族のまとまりにおける父親の役割が大きい。これは分業家庭の主婦の役割の補完ではなく積極的な意義をとり④家事労働の手づくり情緒から脱脚し新しい家庭生活内容を志向していることに注目する必要が大きくなっている。等を指摘できる。